下品な緑地〝活性化〟案に仰天

名古屋に住んでいた頃は、近くの東山公園や平和公園をよく散策したものだ。緑と親しむことで疲れもとれ、心も癒された。

大阪の自宅近くには、そんな緑多き心和む公園がない。行きつけの理髪店主の勧めで、2駅北の服部緑地公園に行った。今年2月下旬で、まだ冷たい風が吹いていた。写真のように梅や菜の花が咲いており、緑道を気持ちよく散策できた。久しぶりに緑の公園を堪能することができた。

大阪府の吉村知事が緑地公園を視察して、民間企業により公園を活性化させるという。この情報をネットで知ったが、大阪日日新聞8月1日「金井啓子の現代進行形」が標題のように「自然への洞察・畏怖ない知事」と批判していた。同感することも多いので、途中から抜粋して紹介したい。

大阪府の吉村洋文知事が先月29日、服部緑地公園を視察した。目的は、ここに民間企業の力を借りて公園の活性化を図るためだという。公園に溶け込む「おしゃれなカフェであったりレストランであったり」を開業し、公園に人を集めると語った。

はっきり言うが、発想が貧困である。いや、貧困を通り越して下品でさえある。知事な公園という空間の意味がわかっていないのではないか。公園と遊園地の区別がつかず、人さえ集まれば成功だと考えているのだとしたら、それは箱モノを建てて人とカネを集めようとバブル経済に踊った自治体や事業者の発想と変わらない。

公園などの憩いの場における「活性化」は都市のそれと同じではない。憩いの場は文字通り心を休める空間であり、公園における活性化とは心が活性化することなのだ。

人を集めてにぎわう場をつくりたければ遊園地をつくればいい。吉村知事の発想は、山があれば削って宅地を建て、森林があれば木を伐採して施設をつくるといった、一昔前の開発思考で、自然や人が憩う空間というものに対する深い洞察も畏怖もない。だから発想が古くさくて貧困なのだ。

公園とは金もうけの場所ではなくて憩う場である。特に服部緑地公園は緑が多く、公園内を歩いているだけで心が落ち着く。

今回の知事の発案は絶対に許せないし断固反対である。これほど腹が立つ話を聞いたのも久しぶりだ。なんとしても阻止したい。

大阪では「維新政治」のもとで、公園が「金もうけの場所」に変質してきた。大阪市だけでなく、豊中市の服部緑地公園などにも手を伸ばしてきたようだ。注視したい。

（2019年8月5日）